

令和4年度 第2回 くるめ支え合うプラン推進協議会 議事要旨

開催要領

- 1 日 時 令和5年3月29日（水） 14時00分～15時20分
- 2 会 場 久留米市総合福祉センター 2階大会議室
- 3 出席者 委員17名
江頭委員、松延委員、堤委員、橋本委員、津野委員、藤野委員、村井委員、森山委員、原口委員、高田委員、菊池委員、刈茅委員、濱崎委員、宮原委員、吉田委員、佐藤(寿)委員、田畑委員
- 4 欠席者 委員7名
佐藤(美)委員、高尾委員、矢野委員、永野委員、渡邊委員、河口委員
(代理：藤井氏出席)、縄崎委員
- 5 傍聴者 なし

次第及び議事要旨

- 1 開会
会 長：本日は、「くるめ支え合うプラン」の中間報告を行う。軌道修正が必要などところはないか等、皆さんの活発なご意見をいただきたい。また、久留米らしい重なり方デザイン事業における AU-formal 実行委員会の取組みについても皆さんのご意見をいただきたい。
- 2 報告事項
(1) 令和4年度 第1回 協議会 議事要旨
※資料配布のみ
- 3 協議事項
(1) 支え合うプラン前期取組の進捗報告について
【主な質疑応答・意見等】
委 員：居宅介護支援事業所でケアマネジャーとして勤務している。ゴミ出しができないという利用者からの相談が結構多い。自助を基本としつつ、地域での互助、次に訪問介護サービスなどの共助があると思うが、ケアマネジャーとしてサービス（共助）を導入してしまうことで、互助を飛ばしてしまっていることがある。資料9ページの拡充（2）につ

いては、ゴミ出し支援としての生活支援団体を地域で設置しているということか。

事務局：久留米市では小学校区（校区コミュニティ組織）単位で支え合い推進会議を推進している。推進会議の中で、地域住民のニーズとして「ゴミ出しに困っている」ということがあり、それに対して地域でできることとしてゴミ出し支援を実施している校区がある。

委員：地域の方が「ゴミ出しするよ」と声かけて下さることもあり、大変ありがたい。

事務局：ケアマネジャーが把握した地域のニーズを共有していただき、そこから地域の皆さんと検討していくこともできると思う。

会長：認知症の方などはゴミ出しの曜日を忘れている方もいる。近所の方が「ついでに出すよ」と声をかけて下さるのはありがたい。

委員：最近、娘（２３歳）や娘の友人と話をする中で、自分の考えを見直す機会があった。コロナ禍で就職活動をしてきた世代で、オンライン面接や在宅ワークなどを経験していたことから「今は大変だよね」と声をかけたところ、「どこが大変なのかわからない」と言われた。自分自身は人と人とのつながり、顔の見える関係の再構築が必要と考えて動いていたが、娘たちは「何も困っていないし、今のつながりでちょうどいい」と感じている。このことから、自分の考えや見方を改める必要性を感じた。世代間の価値観の違いもあるため、今後は計画全体を世代別で精査していくとよいのではないかと感じている。次期計画の参考にしていただければと思う。

会長：世代間での価値観の違いなどあると思うが、これに対して事務局はどう考えるか。

事務局：コロナ禍で学生と一緒に事業を行うことがあった。学生は入学式からオンラインで、大人からすると「大変な時に入ったね」という目線で見えてしまうが、学生からするとそれが当たり前の中で暮らしている。そのライフスタイルをベースにどのように社会をつくっていくかを考えていく必要があると感じている。学生から「かわいそうという目線で見ないでください」と言われたこともある。

会長：自分の世代の価値観で見ると、入学式からオンラインで過ごしてきた学生たちは就職活動に対する緊迫感が少ないように感じる。先輩から話を聞く機会もなく、社会は人材不足ということもあり、希望すれば就職先はそれなりにあるという感覚のようだ。社会との接し方も変わってきたと感じている。しかし、計画の取組みについてはすべてを世

代別に示すのは難しいのかなと感じる面もある。

事務局：世代別の計画となるとハードルが高いかもしれないが、それぞれの世代に対して、伝わりやすい伝え方をしていくことは大切だと考えている。世代別に「これなら参加できるかも」と感じさせられる伝え方を考えていくことも必要だと思う。

会 長：伝え方を工夫することは大事なことだと思う。

会 長：資料14ページの自殺対策に関する取組みについて、全国的なデータとして小中学生の自殺が最多となっている。SOS の出し方教育については、小学生に向けても予防的な対策が必要であると感じている。

事務局：久留米市での SOS の出し方教育については、小学生に対しては家庭子ども相談課、中学生に対しては保健所保健予防課が実施している。世代別の関わりという点については、久留米市自殺対策計画を策定する中で重点対象者を子ども・若者に絞って取組み内容を検討している。

（2）久留米らしい重なり方デザイン事業について

【主な質疑応答・意見等】

会 長：AU シートと重層マップの様式は作成中ということか。

事務局：AU シートや重層マップは案を作成し、都度更新している。今後どのように活用するか検討し、使いにくい部分があれば使いやすいようにバージョンアップしていく。

会 長：AU シートがアセスメントシートの一種であれば、相談支援の専門職に意見を求めることでよりよいものになっていくのではないだろうか。

委 員：自分も AU-formal の実行委員を務めている。アセスメントシートは専門職がたくさん書いているため、これ以上のものは必要ないと考えている。AU シートは、「私が思うあなたのステキなところや夢」を対象者と書き合ってみるという使い方。そこから共通項が見えてきたところで取り組んでいく。まずは相手を「知る」こと大事だと思う。対象者がカラオケ好きだったことから、一緒にカラオケ大会をした。実行委員会メンバーや市民活動団体、市や市社協などたくさんの人が参加し、そこでのつながりができ、制度ではできないことができた。一方で「支援」を前面出すことは必ずしもよいわけではない。当事者でもある実行委員会のメンバーから、「それは本当に本人の望んでいることか」と指摘され、考えさせられることもあった。

委 員：従来の支援が良い、悪いということではなく、これまでと違った視点で見てみようとするのが大切だと思った。従来は支援を「受ける側」

の視点が少なく、「支援する側」から見た「支援される側」の視点だったと感じる。ヒアリングなどで支援者に囲まれると「支援される側」は本当のことを言えなくなる人が多く、支援者に気を遣って本人の意思ではないことをやってみようとする人もいる。実際に自分もそうだった時がある。「支援される側」の視点に立った関わりがあると見方も関係性も変わると感じている。

会 長：インフォーマルの側があまりにも肩の力を入れすぎると、当事者が参加しにくくなる場合があると思う。一方でインフォーマルに当事者がいるということはとても大事なことだと思う。

事務局：AU シートは支援者と対象者の両方が記入する様式となっている。本人が本音や意思を表明することができるということを様式で示していることがポイントである。本人との関係づくりが中心となっている。

4 その他

・任期満了に伴う会長挨拶

会 長：現在進めているフォーマルとインフォーマルの連携の取組みについては、地域福祉の根幹であると感じている。実際に実現するのは難しいという現状がある中で、AU-formal 実行委員会という民間で現場をよく知っている任意団体から提案されたことは久留米市の民力の強さだと感じている。その民力をうまく行政が活用しながら、一緒になって事業を展開していくということは全国的にモデルになると感じている。くるめ支え合うプラン推進協議会に関わったおかげで、委員の皆さんをはじめ様々な人と出会い、つながることができたことは自分自身の活動の糧にもなっている。3月末で大学教員を退職するが、4月以降は大学の地域連携センターの運営に携わる予定である。今後も皆さんとお会いできる機会があるので、引き続きよろしくお願いしたい。

5 閉会